



独立行政法人 国立病院機構

# 四国子どもとおとなの医療センター

## —今月のショット—

病院ボランティアの募集をスタートしました。興味のある方は是非お問い合わせください。080-9048-6756(担当 森)

成育エントランス自動販売機に転写されたスケッチ。2013年3月29日 夜ボランティアで車いすを修理するAさんが描かれています。(画:増田妃早子)



## 2014年 5月号

### —院内の小さな声から—

看護学校の先生から連絡があり、ホスピタルアート関係の写真が欲しいとのこと。岡山で行われる会で、病院の紹介をしてくださるようです。「去年、同じ会で病院の写真をちらっと披露したら、出席している皆さんがとても感激してくださいました。こんな病院で働ける事を誇りに思っています。一度この病院を見たらきっと白い壁では物足りなくなりますね。」と、満面の笑みで話してくださいました。この仕事をしていて良かったと思う瞬間です。病院で働く職員さんが誇りを持ってくれるような環境づくりがホスピタルアートの目指すところです。看護学校の先生方は他にも事あるごとに相談に来られます。封筒を新しくしたいのでデザインを考えて欲しい。とか、カウンセリングルームを作ったのでそこに飾る絵画を選んで欲しい。とか。その問いに対して答えを出すのは簡単ではないけれど、一緒にあれこれ考えて導き出した答えが、受け入れられた時の喜びは何よりも大きいものです。そして、「想いを形にするためにあれこれ話し合える場所」が院内にある事がとても意味のある事だと思います。何かの想いが心にあるとき(それが問題点でも希望でも)飲み込まずに、まずは心の外に出してみる事が大切です。そうすることで全ては動き始めます。それはこれから先に訪れるより良い状態への変化の兆しなのです。

### ボランティア

ボランティア募集が始まりましたが、当院にはこれまでも旧善通寺病院や香川小児病院時代からボランティアを続けてくださっている方がいます。これから活動を始めるにあたってどのような仕組みにすればやりがいを感じつつ、長く続けていただけるのか。ヒアリングしました。

長年に渡って車いすを修理しているAさんは話してくれました。「ボランティアは自分の生き甲斐だ。成育入り口の自動販売機に自分の姿が描かれていると知人から知らされた時には涙が出た。誰かが見ていてくれたと思うと嬉しかった。これからも得意な事で役に立てれば嬉しい。でも、これしか出来ない。他の事をお願いされてもそれは出来ない。」児童思春期病棟に入院していた事のある女性は「好きな手芸で誰かが喜んでくれるのは嬉しい。ボランティアはずっと続けたい。でも、誰かと一緒に作業するのは抵抗がある。曜日を定められると来られない。」今回新しく応募してくれた50代の女性は、「過去に教育の現場で働いた事もあったが、病気がきっかけで自暴自棄に陥った。しかし周りの人や愛犬からの愛情によって乗り越える事が出来た。今度は自分が与える側に立ちたい。何かを作りながら患者さんとゆっくり話が出来ると嬉しい。」心の底から響いてくるような声で話してくれました。

ボランティアにかける想いは人によって違います。動機もしたい事も違います。でも、皆、自分の経験や力を何かの形で役立てたいと思っています。その想いをどれだけありのままの形で病院に届けてもらうか。しかし、病院という場所で行われるボランティアには特別な配慮が必要であることも確かです。親切の押し付けにならず、受け取る側にとってベストなタイミングで届く時、はじめてその想いは循環し始めます。病院としては単なる作業協力を、病院サイドの都合でお願いするという視点ではなく、相方向のコミュニケーションによって、提供する側と受け取る側の接点を探りつつ、時間をかけながら調整してゆく必要があると感じています。



### 今月の一枚

作家:イケダユウコ 「こんにちは」

ことばはなくても  
いつもそっとそばに居てくれるもの  
自然物を描きました。